平成２９年度卒業式　学長式辞

愛媛大学長　大橋　裕一

例年になく厳しかった冬も遠ざかり、太陽の日差しが日に日に温かくなってまいりました。三分咲きの桜に春の訪れを感じるとても穏やかな時候となりました。

この佳き日にあたり、ただいま、１，８０７名の皆さまに学位記を授与させていただきました。ご卒業まことにおめでとうございます。皆さまに、心からのお祝いを申し上げます。

また、本式典にご出席されているご家族の皆さま、そして関係の皆様方にお慶びを申し上げますとともに、本学に対する日頃からのご支援に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。

さて、本日の式典には愛媛県の各界を代表する方々、愛媛大学経営協議会の委員の方々、そして愛媛大学にゆかりの深い先輩諸氏に来賓としてご臨席を賜っております。皆さま方には、ご多用の中をご参列いただきまして、まことにありがとうございます。厚く御礼を申し上げます。

この「卒業」というイベントは、ひとりひとりの人生における極めて大きな節目、次なる目的地へと旅立つ晴れの船出です。卒業される皆さまの多くは、「就職」という形で、住み慣れた大学から巣立っていくこととなり、明日からは、社会の荒波の中を、自らの力で進路を切り開いて行かねばなりません。在学中に習得した知識や技能、そして思考・判断力を最大限に活用し、最終ゴールに向かって邁進してください。

また、卒業生のうち、３３７名の皆さまは大学院へと進学し、勉学活動を続けられるとお聞きしています。大学院においては、「真理の追究、あるいは原理の応用」を目標に、持てる「知の力」をさらにブラッシュアップしてください。

さて、みなさんが羽ばたいていく世界は、今、混乱の中にあります。技術革新の中、ヒト、モノ、カネ、情報などが国境を超えて自由に行き来するようになりましたが、皮肉なことに、それが世界的な富の格差を生み、その反動として自国第一主義のトレンドが強まりつつあります。

他方、国内にも課題は山積しています。超少子高齢化が待ったなしで進行する中、若者を含む人的資源は都会へと吸引され、地域間そして個人間の経済格差がより顕著となっています。その一方で、人工知能や IoT に象徴されるスマート社会の幕が、今、本格的に開こうとしているのです。

では、そのような不確実な社会を生き抜き、幸せで豊かな人生を送るにはどうすればいいのでしょうか？未来へ旅立つみなさんに、是非お贈りしたい言葉があります。それは「ひとのために働く！」ということです。

みなさんは「因果応報」という言葉をご存知でしょうか。よくないニュアンスで使わ

れがちな言葉ですが、もともとは仏教の教えであって、「人間は良い行いをすれば良い報いがあり、悪い行いをすれば悪い報いがある。」という意味です。
京セラを起業した稲盛和夫氏は、その著書「生き方」の中で、この因果応報のルールについて次のように述べています。

『長い目で見れば、誠実で善行を惜しまない人物がいつまでも不遇にとどまることはないし、怠け者でいい加減な生き方をしている人がずっと栄えることもない。３０年、４０年というスパンで見れば、誰しも日頃の行いにふさわしい報果をそれぞれの人生において得ることになるので、日ごろからたゆまずに善行を積み重ねることが大切である。』

要は、見返りを求めず、他者（不特定多数）のために働いてこそ、その人の人生は豊かになるということですが、この考えは私の持論である「人生・弥次郎兵衛理論」にも通じるものです。「弥次郎兵衛」とは、指に乗せて遊ぶ日本の伝統的な玩具で、短い胴体の左右の長い手でバランスをとる仕組みになっています。弥次郎兵衛の重心は胴体の支点よりも下にあるため、右に傾けると次は左に傾く安定した振り子運動が繰り返されるのです。

人生では、いいこと（幸せ）と悪いこと（不幸せ）は弥次郎兵衛の振り子運動のようにほぼ交互に訪れます。誰しもが長い人生における足し算では幸せと不幸せのバランスがプラスマイナスゼロとなるように初期セットされていますが、この 50－50 のバランスは「人のために働く」ことにより、60－40 あるいは 70－30 へと変化し、人生はより幸せな方向へと導かれていくのです。

「人の価値とは、その人が得たものではなく、その人が与えたもので測られる。」というのはアインシュタインの名言です。ここでは、莫大な富を築いた、高い位についたということではなく、いかに他者を支援したか、他者に幸せを与えることができたかが重要であると説かれています。なによりも、人に与えることを幸せと思うことですね。みなさんも一度、自分自身の弥次郎兵衛のバランスを確認してみてはどうでしょうか。

最後になりましたが、十分な学士力、社会人力を身につけて卒業されていく皆さまが、それぞれの分野で素晴らしい成果をあげられることを心より期待し、私からの餞（はなむけ）の言葉といたします。